ユニテリアン社会主義者小笠原誉至夫と南方熊楠

武内善信

はじめに

本稿で紹介する小笠原誉至夫は、和歌山と大阪における初期社会主義運動の草創期に重要な役割を果たした人物である。和歌山における彼の活動は、拙稿「日清戦後における紀北の労働運動と初期社会主義運動――小笠原誉至夫を中心に――」『和歌山地方史研究』一五号（一九八八年）で紹介しておいた。大阪での彼の行動は、荒木傳『なにわ明治社会運動碑』（拓植書房、一九八三年）にある程度書かれている。しかし、彼がどのような経歴をへて初期社会主義者となるに至ったのか、まだ明らかにできていない。小笠原は自由民権運動からユニテリアンをへて初期社会主義者になるという、興味深い経歴の持ち主なのである。そこで先ず、小笠原誉至夫の半生について出来るだけ明らかにしようというのが、本稿の目的である。また、紙面の関係もあるが、草創期の初期社会主義運動において彼が果たした役割についても、最低限必要な範囲で触れることにする。

次に、小笠原誉至夫の経歴の中で興味深いのは、南方熊楠との関係である。近年、南方熊楠が在米時代に邦人民権家と交際し、彼らと『大日本』という新聞を出していたことが、注目されている。(1) だが、南方がどのようなきっかけ

で自由民権運動と係わりを持ったのか、はっきりしていない。南方と自由民権運動との関係を考える上で、小笠原誉至夫は注意を要する人物なのである。そこでこの点を明らかにするため、小笠原誉至夫と南方熊楠との係わりについて考察してみたい。これが、本稿のもう一つの目的である。

一　両者の生い立ち

小笠原誉至夫の経歴を書いたものとしては、山崎伝之助『和歌山県人材録　前編』（和歌山日日新聞社、一九二〇年）、山崎順平『和歌山県紳士名鑑　上巻』（和歌山市海草郡紳士名鑑編纂所、一九二五年）と『和歌山県議会歴代議員名鑑』（和歌山県議会、一九六九年）があるが、あまりに簡単すぎるし、誤りもある。また、南方熊楠の史料等に小笠原について触れたものはあるものの、彼自身に関する史料は少ない。そこで先ず、南方との係わりに焦点を当てつつ、できるだけ詳しく彼の経歴について述べてみたい。

小笠原誉至夫は明治元年（一八六八）四月一七日、和歌山城下本町[2]に住む有地芳助の長男に生れ、有地芳太郎と名付けられた。本町通りは和歌山城の大手筋にあたり、一番の目ぬき通りである。明治三九年八月一四日付『和歌山実業新聞』の広告欄に「日本旅館火災保険株式会社和歌山代理店　本町四丁目有地芳助」とある。また、弟の有地光之助も明治四五年に職工数三九名の「有地組鉛筆製造所」を創設しており、[3]有地家は何らかの事業を行なっていた可能性が高い。ちなみに、明治四〇年一一月二八日付『和歌山新報』付録の「和歌山市長者鑑」に資産一万五千円以上の欄に有地芳助の名が見える。

一方、南方熊楠は前年の慶応三年（一八六七）四月一五日、同じ和歌山城下橋丁の南方弥兵衛の次男として生れた。

南方弥兵衛は和歌山でも屈指の豪商で、明治五年（一八七二）にすぐ隣の寄合町に移転した。熊楠は明治六年雄小学に入学し、一二年に和歌山中学に入る。南方熊楠は、小笠原誉至夫（有地芳太郎）とは「幼小よりの友」であると述べている。[4] しかし、小笠原の幼年時代のことはほとんど不明であり、いつ、どこで南方と友達になったのかわからない。もっとも、本町と橋丁や寄合町とは歩いて一〇分程の距離であり、同じ金持ちの実業家の子供ということであれば、知りあう機会は多かったであろう。

南方熊楠は明治一六年（一八八三）和歌山中学を卒業し、共立学校を経て一七年九月大学予備門（旧制一高）に入学する。他方小笠原誉至夫（有地芳太郎）も、鎌田栄吉の推薦で明治一六年一月一五日に慶応義塾に入社した[5]後、同じ年に大学予備門に入学した。彼らは同期生であったばかりでなく、東京で同宿していたこともあったようだ。[6] 同じ学年には夏目漱石、正岡子規、山田美好、芳賀矢一、秋山真之、そして同郷の薗田宗恵らがいる。薗田は別にして、南方や小笠原がこうした多彩な人々とどのような交流をもったのか、判然としない。南方と自由民権運動との係わりを考える上で、松山中学時代に民権青年であった正岡子規などは、確かに気になる存在である。しかし、後年の小論や手紙のなかに正岡子規や山田美好などについて触れた文面もあるにはあるが、当時南方が彼らと親しく交友した形跡は今のところ確認できない。南方の日記を見ても、明治一八年一一月一五日に秋山真之が来訪しているぐらいで、これ以外彼らと交際した記述は見当たらないのである。これに対し、「有地芳太郎」の名前は日記にしばしば出ており、南方と彼との交友がいかに親密であったかが窺える。つまり、小笠原誉至夫は大学予備門時代に南方が最も交際した人物の一人だったのである。

二　自由民権運動との係わり

両山崎前掲書に、小笠原誉至夫が大学予備門入学後、沼間守一について自由民権運動に熱狂したとある。ちなみに、自由民権運動に身を投じたためか、明治一八年（一八八五）九月一二日条の南方熊楠の日記によると、落第生の中に正岡子規らとともに彼の名があり、結局のところ小笠原は大学予備門を中退するのである。小笠原自身この時のことを、「僕は十八九歳の頃より社会党の信仰個条の幾部を崇信し自ら称して東洋の社会党員と為し類を呼ひ友を集め危言激語、以て盛に言論界に横行せり」[7]と、後年語っている。この「社会党」の問題はさておき、彼が本当に沼間についたのか、またどのような活動したのか今のところわからない。小笠原が改進党系であった形跡は、その後ほとんど見受けられないのである。彼が沼間守一についたのなら、それは当時他の政党のほとんどが解党しており、沼間が孤塁を守った改進党だけしか残っていなかったという事情によるものであろうか。

小笠原誉至夫が大学予備門入学後、自由民権運動に加わり、内乱を企てるなど過激な活動を行なっていたことは間違いないようだ。明治二〇年二月頃、小笠原は神田の旅館で仲間と政府を転覆するための内乱を企てたが、和歌山県下漫遊中の翌年七月、計画の発覚を観念して田辺警察署に自首している。ただし、和歌山軽罪裁判所田辺支庁は、事件を証拠不十分として免訴した。[8]なお自由民権時代、彼は「浅井誉至夫」を名乗っている。

小笠原誉至夫はその後、「僕の二十一二歳の頃流浪大阪に来れり、……僕の大阪に在るや或は剣を懐にして人を刺さんとし、或は盗賊博徒に親みて幾多の秘密を画策し、危激なる言論を弄ひ、暴戻なる動作を壇にし」[9]たと語っている。たとえば、明治二二年二月一六日付の『大阪毎日新聞』によると、彼は「明治二十一年十二月十九日大阪府にお

いて認可を得ずして政談演説会を為し」、集会条例違反に問われている。また、二二年二月一一日、憲法発布を祝って大阪青年会員が「大運動会」を催したが、小笠原は「同遊会に反駁を与ふるの演説をなし」、その後他の六、七名と藤田伝三郎方と日本土木会社に乱入する事件を起こし、翌日逮捕されている。[10] 彼が憲法発布の祝賀会に反駁したのは注目してよい。

当時大阪には、明治二一年末の保安条例で多くの民権家が集まってきていた。その中心の一方には中江兆民の『東雲新聞』があり、他方には大阪壮士倶楽部があった。幸徳秋水もこの時大阪にいた。明治の社会主義運動も、部落解放運動も、改良演劇運動なども、当時の大阪を始源としたという評価もある。[11] 小笠原誉至夫もこの周辺で活動していただけでなく、彼らの影響を受けていた形跡が窺える。先ず、彼が言っていた「社会党」とは、大阪壮士倶楽部が平民社（後、日本平民社）から発行した『社会灯』と関係があるのかもしれない。というのは、小笠原は明治三一年に後述の日本平民新聞社を創設するが、この命名はこの時の記憶がそうさせたものと思われる。次に、部落解放運動において兆民の「新民世界」という論説や、大阪壮士倶楽部の前田三遊という人物と同倶楽部の森清五郎らの公道会の運動は、高く評価されている。ところで、具体的なことはわからないが、小笠原も部落問題の解決に尽力したようである。というのは明治三五年頃、小笠原とヤクザとの間に新聞記事が原因で紛糾が生じ、彼が創設した和歌山実業新聞社が襲撃されそうになったとき、急を聞いて被差別部落民七、八〇人が駆け付け、武装して新聞社を守備したというのである。そしてこれを目撃した、児玉仲児の次男充次郎は、小笠原に大いに共鳴し、新聞で「部落解放」や「同胞融和」を叫んだと語っている。[12] 小笠原誉至夫が部落問題に取り組んだとしたなら、少なくともこの時代の影響を抜きにしては語れないであろう。

三　南方熊楠と小笠原誉至夫

小笠原誉至夫の藤田伝三郎方乱入事件は、南方熊楠も明治二二年三月一二日条の日記で言及している。これ以外にも、南方は後年のいくつかの手紙のなかで、小笠原が壮士の親方となり、活版工を唆して国会に馬糞を投げつけさせたり、鳥尾得庵を殴りに行ったりしたと書いている。[13] 彼が壮士として活動していたことは、南方も知っていたようだ。

ところで、大学予備門時代の南方熊楠の日記を見ると、自由民権運動と関係した筆禍事件や激化事件の裁判に強い関心を抱いており、どういう訳か壮士のシンボルとも言うべき仕込杖を買っている。[14] そして、南方は大学予備門を中退して渡米し、そこで亡命民権家たちと交際して『大日本』という新聞を発行するのである。その直前の大学予備門時代に、南方が最も交際していた民権青年が小笠原誉至夫であった。それゆえ、南方が自由民権運動と係わりを持った大きな要因の一つに、小笠原の存在があったと考えて間違いなかろう。もっとも、彼が南方にどのような影響を与えたのか、具体的なことは一切わかっていない。この点の解明は今後の課題であるが、南方熊楠と自由民権運動との係わりを考察する上で、小笠原は最も注意を要する人物であることは、確かである。

もっとも、後年の手紙に書かれた南方熊楠の小笠原誉至夫に対する評価は、決して高いものではない。この点で、孫文が和歌山の南方を訪ねたとき、小笠原がとった行動に南方が不信を抱いたという問題がある。大正八年（一九一九）九月一六日付上松蓊宛の熊楠の手紙によると、明治三四年（一九〇一）二月一四日、在英時代の友人であった孫文が温炳臣を伴って和歌山市に南方を訪ねた際、小笠原誉至夫が温と友人で、たまたま電車のなかで彼らと会い、小笠原が孫文の来和を知事に密告したため、刑事が南方のところに乗り込んできた、というのである。[15] しかし、これは

あくまで南方がそう思ったというだけで、実際に小笠原誉至夫が密告者であった確証にはならない。自由民権運動に加わり、しばしば警察の厄介になった小笠原誉至夫は、後述するように、この時期も引き続き社会運動に取り組んでいる。その彼が官憲に密告したとは考えにくい。彼が密告せずとも、孫文に尾行が付いていたであろう。それに当日の熊楠の日記には、小笠原が密告者であったとか、刑事が南方のところに乗り込んできたとか、一行も書かれていない。むしろ、その日夜まで四人で飲食し、翌日孫文たちが帰った後、小笠原宅を訪れ夜遅く迄話していたことが、日記に記載されているのである。もし小笠原が密告者であったなら、南方が翌日小笠原を訪れて親しく話をすることなど、曲がったことの嫌いな南方の性格からしてほとんどありえないことである。一八年後の南方の手紙の記述は、彼の思い違いか、一種の誇張である可能性が高い。確かに、南方がしばしば語っているように、小笠原は「才物」であり、この点彼の性格からして、小笠原はうさんくさい人物と思われていたであろう。[16] しかし、その後も南方は小笠原との関係を断ってはいない。南方は、「御進講」や娘の病気、彼の死後の解剖の件など、重要な事項が生じた際には、小笠原を頼っているのである。[17]

四　地方政治家への道

小笠原誉至夫は、遅くとも明治二六年（一八九三）には故郷に戻ったようである。小笠原は、「其後東流西浪南船北馬の末翻然大悟して郷里に帰り暫く世間を韜晦して純然たる一地方の究措大と成り済まし先ず家政を整理し心身を修養し以て静かに時勢の推移を洞察しぬ」[18]と語っている。しかし、帰郷後しばらくは壮士としての活動を止めていない。明治二六年末に『和歌山県会議員論評』という本を出版するとともに、翌二七年三月には彼の発起で「百錬社ト

称スル団体ヲ組織セント計画」し、「数十名ノ同意加盟者ヲ得テ」設立し、『百錬鉄』なる雑誌を発刊したようである。同年五月、小笠原は和歌山市長の「俸給増額ノ決議」を「不当ト為」し、種々運動を行なったが、「或ル仲裁者アリ」て「市会及市長攻撃運動ヲ断然中止」したため、壮士たちが退社し、百錬社は瓦解したと言われている。[19] 彼がしばらく「静かに時勢の推移を洞察し」たのは、この後のことのようである。明治二八年七月に出された『和歌山漫評』は、「俠骨を以て鳴るの誉至夫浅井君、近頃、如何、杏として聞くなし」と述べ、「雲を起せ雨を呼んで油然として立て」と促している。なお、この頃彼は小笠原若枝と結婚し、「小笠原誉至夫」となった。[20]

明治三〇年三月、小笠原誉至夫は日刊の『和歌山実業新聞』を創刊した。彼は、再び本格的に活動を開始したのである。ただ、創刊当時の『和歌山実業新聞』が残っていないため、小笠原がどういう目的で創刊したのかわからないが、おそらく地域の政治や経済に対して彼の意見を発表する手段としてこの新聞を発刊したのであろう。『和歌山実業新聞』は『和歌山新報』『紀伊毎日新聞』とともに、和歌山市を代表する新聞となる。

明治三一年四月三日、和歌山市岡公園岡東館において「和歌山公民会」が創立された。この会は、従来市政は公共事業に消極的であると批判し、商業会議所の設立や築港、内川改修といった問題に積極的に取り組むように求めて設立されたものである。しかし、当時市会議員の半数改選の時期であり、市会が議長の森懋派で独占されていることを不満として、反対派が集合したというのが真相のようである。この会の中心人物は初代和歌山商工会議所会頭となる志賀法立正で、二七五名が発会式に参加しており、小笠原誉至夫は会の「常議員」に選ばれている。[21] その後、彼は和歌山市区の県会議員に押され、明治三二年九月に当選した。小笠原は新人議員でありながら、議会で華々しく活躍している。

小笠原誉至夫は、このように地域の政治に取り組む一方、憲政党の近畿青年会幹事となり、明治三一年八月頃元寺

町一丁目に憲政党近畿青年会和歌山支部を設置した。[22] また、県内各地に出かけていって憲政党の演説会に参加している。そして、明治三三年一一月二五日の政友会和歌山県支部創立総会では、評議員の一人に指名された。[23]

小笠原誉至夫がたどった自由民権運動→新聞の発刊→県会議員→政友会というコースは、その順番はどうあれ明治の多くの政治家が歩んだ道筋である。そして、代議士となるか、少なくとも県会議員として地方政界で重きをなすというのが、お決まりのコースであろう。普通であれば、彼もこの道筋を進んで行ったものと思われる。だが、小笠原はこれとは別の道を歩むことになる。そのきっかけを与えたのがキリスト教であった。

五　ユリテリアンから初期社会主義へ

小笠原誉至夫は帰郷前後の時期、キリスト教の熱心な信者になったようである。明治二五年（一八九二）八月二五日条の南方熊楠の日記に、「有地芳太郎は近頃耶蘇教熱心に至り」と書かれている。彼が最初キリスト教の何派に属したのかわからないが、少なくとも明治三一年一一月頃までにはユニテリアン協会に入会したようである。『六合雑誌』二二四号で、佐治実然は地方におけるユニテリアン協会の主な会員として彼の名を挙げている。小笠原はユニテリアン協会に入会することにより、前節で述べた狭い意味での「政治」活動だけでなく、他方では社会運動にも取り組んだ。なお、これ以後の彼の活動は前掲拙稿に詳しいので、本稿では紙数の関係もあり、最低限必要な範囲の記述にとどめることにする。

小笠原誉至夫は明治三一年一一月末頃、中型八頁だての『日本平民新聞』を和歌山市で創刊した。新聞発刊の目的は「貧しき微かなる平民の為めに信実なる見方」となり、「現今の社会組織を改造」することであると、彼は述べて

いる。具体的には、「土地国有、鉄道国有、所得税累進の割合、財産相続税、華族全廃論、工場条例幷に労働者保護律の制定、普通選挙実施、監獄制度の改革、貧民学校及無料病院の設立、等の問題」の「利害を講究し得失を調査し及び其方法を発見」することであった。この『日本平民新聞』は翌三三年二月に廃刊されている。それは約三か月の短い期間であった。だが、日清戦後の時期に彼がこの新聞を通して、こうした民主主義的課題に取り組もうとした意義は小さくない。

次いで明治三二年（一八九九）五月三日、小笠原誉至夫は和歌山市に実業会館を設置した。翌三三年三月に発表した実業会館の趣旨と規則によると、「富の分配、慈善事業の経営、労働者の教育等苟くも資本と労働を調和せんか為めに必須なる万般の社会問題を研究する」ことが、実業会館の目的であった。そして、演説会の開催、書籍冊子の頒布、会館の建設、新聞雑誌縦覧所の設置などが具体的な運動として提起されている。つまり、実業会館は啓蒙活動が中心で、労使協調を主眼とする社会改良主義というのが基本的な性格と言ってよいだろう。しかし、それはあくまでも労働者の立場に立った労使協調であり、社会の改良であった。それゆえ、片山潜は彼の活動に注目し、『労働世界』第五八号で実業会館の趣旨と規則を紹介し、また『日本の労働運動』でも言及している。なお豊崎善之介が会館の名誉幹事になっており、実業会館も基本的にはユニテリアンとしての活動であった。

小笠原誉至夫はこの時期、二つの顔を持っていたと言える。つまり、政友会の地方政治家という顔と、ユニテリアン派の社会運動家という顔である。しかし明治三四年の夏、小笠原は地方政治家という側面を脱却し、自由民権運動を闘った彼にとっては本来の社会運動家として生きていく決心をした。そのきっかけとなったのが、次男の死であった。次男の死で小笠原は、「僕は衷心人生の恃むべからざることを大悟し、遽然意を決して僕が畢生の事業に着手せんことを覚悟した」と語っている。彼は、「一身を献けて実業会館の事業に尽力せんと欲し先づ八月三一日附を以て

和歌山県会議員の職を辞し」[24]、そして一〇月社会主義協会に加盟したのである。

ところで、社会主義研究会が結成されたのが明治三一年一〇月一八日であったが、同年一一月末の『日本平民新聞』で小笠原誉至夫は一種の社会主義防御論を表明していた。社会主義研究会は明治三三年一月に社会主義協会と改称されたが、同年三月の実業会館の趣旨で、彼は社会主義防御論を取らず社会主義に注目するよう促している。そして、明治三四年五月一八日に社会民主党が結成された後、社会主義協会に入会したのである。それゆえ、彼の活動は、常に一歩ずつ遅れているものの、日本の初期社会主義運動に呼応したものだったと言えよう。そして、草創期の初期社会主義者はキリスト教徒、とりわけユニテリアン派の人たちが多かった。彼が初期社会主義に接近したのも、自由民権時代の体験の名残が多少窺えるが、主にはユニテリアン派の影響によるものであったと言えよう。

六　小笠原誉至夫と初期社会主義運動

和歌山における初期社会主義は、先ず最初に小笠原誉至夫によって導入された。そして、彼の影響で『和歌山実業新聞』の周辺に初期社会主義者が集まって来る。それは同紙の記者をした、高尾亮雄（楓蔭）、吉田笠雨、児玉充次郎（怪骨）らであった。かくして和歌山実業新聞社を中心に、ある種の社会主義グループが形成される。彼らは新聞などで社会主義や非戦論を訴えた。こうした雰囲気の中で、青年たちのなかに社会主義や非戦論の影響を受けたグループが新たに生れてくる。それは三木町の日本基督教会和歌山教会に出入りする青年たちであった。即ち、沖野岩三郎（五点）、山野虎市（死骨）、加藤一夫、杉山元治郎、玉置真吉といった人たちである。これまで和歌山県における初期社会主義運動の中心は、紀南の熊野であるとされていた。しかし、運動の中心が熊野に移行するのは日露戦争以

後のことであり、それ以前は紀北の和歌山市が運動の中心だったのである。もっとも、小笠原誉至夫も含め彼らはあくまで初期社会主義者であって、現代の社会主義の基準からすると社会主義者とは言えないかもしれない。しかし、明治の社会主義者の多くは、一部の「中心人物」を除いて、各人自己流の「社会主義」を奉じていたと言える。そして、こうした「中心人物」とその周りの多様な人々との「重層性」こそが明治期の社会主義の特徴だったのであり、その中にいろんな発展の可能性が秘められていたのである。[25] 小笠原によって導入された和歌山の初期社会主義運動も、後述の大阪だけでなく、各地の社会運動に影響を与えている。沖野岩三郎と山野虎市、児玉充次郎は明治学院に進学し、賀川豊彦らといっしょに学校でも非戦運動を行なった。卒業後新宮教会に赴任した沖野は、郷里の小学校に就職した玉置真吉とともに、大石誠之助の活動に加わり、「大逆事件」に巻き込まれる。郷里の粉河教会に赴任した児玉は父仲児と協力して、明治四〇、一年頃「雑誌野人を出して主義の宣伝に努め」、[26] その後公娼設置反対運動や部落問題に取り組んでいる。加藤一夫は民衆芸術運動やアナキズム・自由人運動そして農本主義運動と、大正、昭和の様々な社会運動のリーダーとなる。杉山元治郎は賀川豊彦と日本農民組合を結成するなど、農民運動の中心人物の一人としてあまりにも有名であろう。即ち、和歌山の初期社会主義運動は、こうした多様な人々の揺籃の地だったのである。

小笠原誉至夫は明治三四年（一九〇一）一一月一〇日、実業会館の本部を彼の青春の地大阪に移し、翌三五年一月二八日に同所で「労働は神聖也、戦争は非義也」と説く『評論之評論』という館の機関紙を創刊した。[27] 高尾楓蔭や吉田笠雨が『評論之評論』を手伝ったほか、社会主義詩人として有名な児玉花外を記者に迎えた。また、三宅盤や奥村梅皋などが出入りし、『評論之評論』は草創期の大阪の初期社会主義運動を担った人々が集う場であったと言えよう。明治三六年四月に開かれた社会主義大阪大会を準備したのも、小笠原誉至夫をはじめとする彼らであった。また、『評論之評論』は児玉花外を中心とした関西の社会主義文学の機関紙の観を呈した時期もあった。明治三七年一月三

日付の週刊『平民新聞』は、英文欄に「昨年中の日本社会主義運動」と題して、「いまや大阪には多くの会員がおり、彼らはその機関紙として週刊紙を発行している」と書いているが、これは『評論之評論』とその周辺の人々のことを指すものと思われる。

日清戦争後、初期議会以来の基本的な政治対立であった政府と民党との対立が終焉する。[28] それに伴い、政党には吸収しきれないところの、個々の独自の要求を持ちつつ、社会の革新を目指す新しい型の集団が発生してくる。それは普通選挙運動、理想団、ユニテリアン、新仏教同志会、労働組合規成会、社会主義協会、足尾鉱毒反対運動等の団体や運動であった。こうした団体や運動は相互に協力しつつ、日露戦前の首都東京を中心に大きな盛り上がりを見せたのである。しかも、「彼らの影響は、ほとんど東京周辺の都市中間層にとどま」[29]っていたわけではない。彼らの影響は、小笠原誉至夫という人物を通して大阪や和歌山など関西にも及んでいるのである。それゆえ、こうした「大正デモクラシー」とは呼べない日露戦前の民主主義的諸運動の役割は、もっと評価する必要があると言えるだろう。

注

(1) 新井勝紘「アメリカで発行された新聞『大日本』考」『田中正造とその時代』三号（一九八二年）、同「空白の青春」『隣人』創刊号（一九八四年）。

(2) 有地芳助の住所は本町六丁目とされているが、注(5)の住所は本町七丁目五番地である。

(3) 『和歌山市史』第八巻（和歌山市、一九七九年）三六〇頁。

(4)(6) 『南方熊楠全集』（平凡社、一九七一～七五年）別巻1六六頁、四三七頁。

(5) 『慶応義塾入社帳』第二巻（慶応義塾、一九八六年）五四二頁。

(7)(9) 小笠原誉至夫「与高崎知事書」『評論之評論』二号（一九〇二年三月四日）。

(8) 手塚豊「自由民権運動関係小暴動事件拾遺」『法学研究』四〇巻一号（一九六七年）。小笠原誉至夫がこの時期「浅井誉至夫」を名乗った点について、同論文に「和歌山の写真屋浅井家へ入籍、また同〔明治〕二十年五月、芳太郎を誉至夫と改名し

た」とあるが、確認できていない。ただ、明治二〇年八月二七日条の南方熊楠の日記に「有地誉至夫」とある。

(10) 『大阪朝日新聞』明治二二年二月一二日及び一四日付。

(11) 松本健一『幻影の政府』(新人物往来社、一九八四年)。

(12) 児玉生「予は如何にして信仰に入しか(十一)」『福音』一〇四号(一九三一年八月)。

(13)(15)(16) 前掲『南方熊楠全集』9巻三二頁、別巻1六六頁、四二三頁。

(14) 新井勝紘「在米時代の南方熊楠」『南方熊楠日記』1(八坂書房、一九八七年)解説。なお南方熊楠の日記の記述については、同書及び『南方熊楠日記』2に基づいている。

(17) 前掲『南方熊楠全集』第9巻四八四〜六頁、別巻1四二〇頁、四三〇頁。

(18) 注(7)。

(19) 『政党沿革史』(和歌山県警察本部蔵)。なお、これは後年に書かれた警察史料である。

(20) 小笠原家は紀州藩士小笠原庄大夫の家で、『南紀徳川史』第五冊によると九代庄大夫長譎は二五〇石小普請支配で、慶応四年二月に養子保五郎長恒に家督を譲っている(一四三頁)。君枝は保五郎の二女である(小笠原道夫氏の御教示による)。なお、和歌山実業新聞社や日本平民新聞社があった元寺町一丁目三番地は、小笠原庄大夫の屋敷跡である。

(21) 前掲『和歌山市史』第八巻一三八〜一四四頁。

(22) 『和歌山新報』明治三一年八月二四日付、『紀伊毎日新聞』明治三二年一〇月一九日付。

(23) 前掲『和歌山市史』第八巻一四八〜一五〇頁。

(24) 注(7)。

(25) 松沢弘陽『日本社会主義の思想』(筑摩書房、一九七二年)四〜五頁。

(26) 「同志の活動」『社会新聞』明治四〇年七月二八日付。

(27) 注(7)。なお紙数の関係で、大阪での小笠原らの活動の詳細は別稿で明らかにしたい。

(28) 坂野潤治『明治憲法体制の確立』(東京大学出版会、一九七一年)二四一頁。

(29) 松尾尊兊「大正デモクラシー」『論集日本歴史12　大正デモクラシー』(有精堂、一九七七年)二頁。

(たけうち　よしのぶ・和歌山市立博物館学芸員)